
世界のヘツリ

其場凌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界のヘツリ

【Zコード】

N7151S

【作者名】

其場凌

【あらすじ】

大地に定着しなかつた空の子は、生まれるべきではなかつたのか。姉のルーシャと幼馴染のタギイ、優しい人たちに囲まれて、トールは幸せなはずだつた。

世界の終わる場所であり、始まりの場所　ヘツリと定着の謎。ヘツリの使者が語る、世界の仕組み。

トールはなぜ定着できなかつたのか。

その答えを知つたとき、トールの選んだ居場所は　。

定着の儀

弟が生まれた日のことをルーシャはとてもよく覚えている。ルーシャはまだ9歳だった。

子供部屋にまで響いてきた大きな泣き声。ルーシャは眠い目をこすりながらベッドを抜け出て、廊下に出た。小窓から差し込む薄明かりが夜明けが近いことを教えてくれる。

ルーシャは冷えた廊下を裸足で進んだ。半開きになつた扉から漏れてくる赤子の声に引き寄せられるように。

彼女の手が、そのドアノブに触れたときだった。

左横を温かい風が通り抜けた。ちょうど、人ほどの体温の。

ルーシャは振り向いた。が、隣には誰もいない。歩いてきた廊下の先にも。

しかし、彼女が部屋の中に視線を移すと、居た。ベッドの上の母、その腕に抱かれた赤子、傍らには父と、町唯一の助産婦。

それからもう一人。

黒いローブに身を包んだ背の高い人物が、ゆっくりとベッドに近づいていく。その人の顔はフードに隠れていて、ルーシャには見えなかつた。どこか不気味な雰囲気に、少女は少々気後れする。

しかしベッドの上の母は顔を上げ、突然の訪問者に、にっこりと笑いかけた。

「おはよう、ヘツリの使者さん。ルーシャの時と同じ方ね」

母の口から出た言葉に、ルーシャはフードの人がなにをしにやつてきたのかが分かつた。

「ヘツリの使者」は「定着」にやつて來たのだ。昔からある誕生の儀式。

ヘツリの使者が行つ定着を経てよつやく、赤子は「大地の子」となる。

2年前に隣の家のタギイが生まれたときも。9年前にルーシャが生まれたときも。もつと前に、両親やそのまた両親、そのまた両親が生まれたときにも、「ヘツリの使者」はやってきた。例外なく。

「お願いします」

母は、ヘツリの使者へと赤子を預ける。母の手が放れたとき、赤子はふわりとわずかに浮き上がったが、ヘツリの使者は慌てる様子もなく慣れた手つきで赤子の体を腕に抱いた。

まだ定着していない赤子は、大地との結びつきが弱いから、しつかりと抱まえておかなければすぐに空に連れて行かれそうになるのだ。

ヘツリの使者の腕のなかで、赤子は相変わらず泣いていた。

「大地の子よ、君を迎える」

ヘツリの声は低く、人とは思えぬ響きを持っていた。人の、頭のなかに直接入り込んでくるような。

ルーシャは思わず両手で耳を覆い音を遮断した。しかし、ヘツリの声はしつかりと聞こえてくる。

「ヘツリの数だけ、ヘツリの代わりに、わたしが祝そう。1の種、2の芽、3の枝、4の葉、5の花弁、6の果実、7の種、8の芽、9の枝、10の葉、11の花弁、12の果実、一度重ねねばもう十分。6つの大地に根を張るだろつ。大地の子よ、君を迎える準備は整つた」

ヘツリの代わりに、使者からの祝福を受けて赤子は大地の子となる。

そのはずだつた。

「なぜだ……」

困惑した声は、ヘツリのもの。

「1の種、2の芽、3の枝、4の葉、5の花弁、6の果実、三度重ねて迎えよう。大地の子よ…… 大地の子よ！」

ヘツリの使者は荒々しく唱える。彼は、明らかに取り乱していた。

母の顔も不安そうなものになる。

「なぜだ、なぜ……」

ヘツリの使者は赤子の顔を見つめたまま自問する。

「どうした？ 何か起こったのか？ なあ、一体……」

父が全員の疑問を代表して口を開いた。

「定着しない」

それが使者の答えだった。

「この子は、大地の子ではない」

意味を理解する間も与えず、使者が続ける。

母も父も助産婦も、扉の向こうのルーシャも、放心するなか、使者の手から放れた赤子がゆっくりと天に上っていく。使者が腕の力を緩めたのか、たまたま緩んだのか。大地に定着していない赤子は、部屋の天井まで見る見る浮き上がり、ゆらゆらと天井に額を擦りつけながら泣いている。

「どう、して？」

はるか頭上に行つてしまつた赤子に手を伸ばし、嘆いたのは母。

「そんな……」

まだ泣いている赤子を抱く機会もないまま、目を背けたのは父。半分ほど開いた窓から入るわずかな風が、カーテンを揺らす。空への道を、風が赤子に教えたのか。

赤子はゆっくりと、水面をたゆたうように窓辺へと流れて 。

母の手は赤子に届かない。父の目は赤子を追わない。

「 待つて！」

ルーシャの声は、赤子の泣き声よりも大きく、部屋のなかに響いた。

「ルーシャ！」

悲鳴のような母の声。

ルーシャは飛んだ。ベッドに足をかけて、空に行こうとする赤子を、止めるために。

赤子に飛びつくよにして、腕のなかに抱まる。床に着地したとき強かに壁に肩をぶつけたが、あまり気にならなかつた。

初めて抱く赤子は、やわらかくて、温かくて、壊れそうで怖かつたけれど、しっかりと抱きしめていないと空に連れて行かれててしまうから。

ルーシャは赤子を抱きしめたまま、顔を上げた。ヘツリの使者をキッと睨みつけ、

「この子はつ、私の弟よ！」

この日、ルーシャは決めたのだ。たとえ大地の子でなくとも、自分が弟を守るのだと。

大地の子

月日が過ぎ、ルーシャは16になつた。牧羊を営む父を手伝いながら時折、港のある大きな町に出稼ぎに出る。マーロウ家の立派な働き手だ

「ルーシャ、ご飯よ。トールも呼んできて」

母の声に返事をして、ルーシャは外に出ていく。トールのいる場所は分かっている。隣の家のタギイを中心にあの年頃の子供たちが集まる遊び場所があるので

ルーシャも昔はその場所で、いつも日が暮れるまで鬼ごっこをして遊んでいた。

ただ、トールはほかの子供よりもずっと足が遅いせいで、いつもすぐに捕まってしまう。だから、最近はみんな遊んでいるのを側で見ていることが多いらしい。

「あら?」

いつもなら、みんなが走り回っている近くでぽつんと一人、岩のそばに座っている弟。その姿を探していたルーシャのアテは外れた。子供たちは皆、大小さまざま岩の上に乗つっていた。弟も一緒だ。岩の上に立ち、覚えたばかりの数を数えている。

今まで数えたところでルーシャの姿を見つけた少年は、仲間に手を振つてからこちらへと走つてくる。そのスピードは歩いているのと大して変わらなかつたが、彼にとつてはこれが全力疾走だ。

ゆつくりと近づいてくる幼い少年の姿は、ほかの子供たちと何も変わらない。泥だらけの服も。日焼けした肌も。無垢な笑顔も。

ただ一つ、その両足に鉄の枷がはめられていることを除いては。ルーシャは弟と手をつないで帰路につく。

「今日のご飯はなに?」

「さあ、何かしら。なんだと思つ?」

「ぼくね、シチューがいい!」

トールの希望は叶うだろう。そう教えてやつたら、弟は飛び上がって喜んだ。実際は、数センチも飛べなかつたのだけれど。

「今日は何をして遊んだの？」

「タカタカ！」

「タカタカ？」

「タカタカはね、高いところにいるときは鬼に捕まらないの」

「鬼はどうやってみんなを捕まえるの？」

「10秒しか同じところにいちゃいけないの。降りたときに捕まえるんだよ」

「へえ」

そのルールならば、足の遅いトールでも一緒に楽しめる。

「タギイが考えたんだよ」

ルーシャもよく知る隣の家のタギイは、トールよりも2つ年上だ。血氣盛んで大人には手のつけられない悪ガキだが、子供たちのなかではリーダー役を担う。

たぶん、タギイがタカタカを考えたのは、トールのためだ。

「良かつたね、トール」

「うん」

ルーシャを見上げて、弟は大きく頷いた。

ほら、大地の子じゃなくとも、笑っている。

父の作つた足枷が、トールを大地につなぎとめる「定着」。

トールはマーロウ家の子。

ルーシャの弟。

それで良いと、思つていた。

森のヘツリ

ある日の夕刻、いつものようにルーシャが弟を迎えて行くと、遊んでいる子供のなかになぜかトールとタギイの姿だけがなかつた。ほかの子に尋ねると、トールが森の奥へと入つて行つたので、タギイはそれを追つたといつ。ルーシャもすぐに教えてもらつた方角に足を向けた。

それほど深くはない森だ。猛獸がいるわけでもない。しかし、もうすぐ日が沈む。

それに、この森の向こう側には、「ヘツリ」があった。むやみにヘツリに近づいてはいけない。子供のころからずっと、言い聞かせられてきた。

どうしてかは分からぬ。

一度だけ、12歳になつたその日にルーシャはヘツリを見た。この町では、12歳になると一人前の大人とみなされる。その証として、ヘツリの側に行くことを許された。

「ヘツリ」を見たと表現するのが良いのか、「ヘツリ」に行つたと表現するのが良いのか、ルーシャには判断がつかない。どちらも違う気がする。

ヘツリとは、終わりであり始まりである。

大地の終わる崖であり、大地の始まる突端である。森を抜けた先にはへつりがあるだけだ。

切り立つた崖の向こうには何もない。果てしなく空が続き、崖下は白い霧で覆われている。

空と霧の混じり合う場所は、ぼやけてよく分からなかつた。

「トール……」

弟は、ヘツリに向かつたのだろうか。

ルーシャはただ森のなかを急いだ。髪の毛に枝葉が引っかかるのを振り払つて、眼前を塞ぐ木々をかき分けて。

「トール！」

聞こえたのは、タギイの声。

ルーシャが森を抜けた、ほぼ同時に。ルーシャは見つける。ヘツリに向かって歩く弟の後ろ姿を。そして、その後を追いかけるタギイの姿も。

トールはまっすぐに崖へと、ヘツリへと向かっている。何かに引き寄せられるように。

「タギイ！ トールを止めて！」

ルーシャの叫びに、タギイは一瞬振り返る素振りを見せた。しかしトールの片足はもう、大地から一步、外に出ていて。

「トールっ！」

倒れ込むように前へと傾くトールの体。

かろうじて、タギイの手が服の裾を掴むことに成功する。けれども強引に引っ張られた服が、無惨にも引きちぎれてしまつた。ルーシャは見た。

再びヘツリの向こう側へと傾きかける弟。

ルーシャの目の前で、落ちる弟。それを追つて、タギイがもう一度手を伸ばした。

今度はかろうじて手を掴む。

しかし、崖っぷちに立つタギイの足元は、その重さに耐えられなかつた。

足元が崩れ、バランスを失つたタギイは、しかし落ちてしまう前に、自らが落ちる反動を利用してトールの体を投げるようにして地面に引き戻した。軽いトールの体は簡単に、崖の上へと投げ返される。

一瞬の出来事に、ルーシャは何が起つたのか理解できなかつた。

弟は地面に尻餅をつき、呆然と、ヘツリを見ていた。

タギイが、代わりに落ちて行つた、崖の向こうを。

「……タギイ！」

崖の向こう側を覗き込んで、広がるのは真っ白な霧ばかり。

トールの体を抱きしめて弟が無事だったことを確かめながら、ルーシャは泣いた。

「一体、どれくらいの時間そうしていたのだろう。みんなに知らせなければ。

日が暮れる前に。

「トール、トール？」

呼びかけても返事のない弟は、じちらに焦点を合わせる」とはなく、まだヘツリの向こう側を見ていた。

「……タギイ？」

弟の小さな唇が、求めるよひに名前を呼ぶ。

「タギイは……」

ルーシャには何も応えられなかつた。しかし、

「タギイ、どうしたの？」

もう一度、弟が発した声はすでに正氣を取り戻したもので。だからこそ、まるで本人に話しかけるかのようなその言葉が信じられなかつた。

弟の視線の先は、ルーシャの肩越しに向けられている。

「どうしてそんなところにいるの？ タギイ」

重ねて問う弟の無邪気な声に、ルーシャは、恐る恐る振り返る。ヘツリの向こう側に果てしなく続く空と白い霧を背に、少年が立つていた。

先ほどヘツリの向こう側に落ちたはずの少年は、大地にしつかりと足を付けている。真っ黒に日焼けした顔をきょとんとさせて。

「なにびっくりした顔してんだよ、トール。ルーシャもタギイは何も覚えていない様子で、姉弟にいつも通りの笑みを向けた。

懐かしい夢を見た。

タカラタ力をして遊ぶ、まだ十に満たない幼い子供たち。鬼を出し抜いて大きな筋に身軽に飛び移った少年は、中でもひとりわ体が大きく、顔は真っ黒に口焼けしている。

「トール、こっち来い！」

少年が、自分よりも一回り小さな子の名を呼ぶ。

鬼に追いかけられそうになっていたトールは必死に筋によじ登る。少年は手を差し出してズボンのすそを掴むと一気に引っ張り上げた。「ありがとう、タギイ。本当に、ありがとう。ぼくね、とってもうれしい！」

ただ引っ張り上げただけなのに、トールは青い田をせりせりと輝かせて、タギイを見上げてくる。

「何が？」

「だつて、みんなと一緒に遊べるから……！」

無邪気に笑うその両田が揺らぐ。泣くのかと思つた。

「タギイのおかげだね」

けれども、トールは涙をぐつと堪えて、精一杯の感謝を言葉で伝えようとしていた。

「ルーシャも、タギイはすごいねって言つてたんだ」

少年の姉の名が出ると、タギイは一瞬たじろいだ。

「ルーシャが？」

「うん、タギイがいてくれてよかつたって！ ぼくもルーシャも、タギイのことがだいすきだよ」

トールは笑うと両頬のえくぼがはつきと出る。その表情は姉のルーシャとよく似ていた。

「ぼく、もつともつとタギイと、みんなと遊びたいな」

見上げてくる青い目がまぶしくて、タギイは少しだけ気まずくな

つた。決して下心があつてトールと遊んでいるわけではないのに。「遊べるだろ。つか、前から思つてたんだけどさ、その重たそうな足かせ外せよ。そしたらもつと早く走れるぜ」

ちょっととした思いつきだつた。

それが、どんな結果を生むのかなんて、深く考えもせずに。足かせを外してやると、トールの体はバランスを失つたように揺れた。

「タギイ……？」

「ほら、軽いだろ？」

トールの表情は強ばつたままだつた。やがて、その視線の高さが自分とほぼ変わらない位置にある違和感に、タギイは気づく。

「タギイ、ぼく……」

「すげえ、トール！ お前、浮いてる……」

恐る恐る尋ねるトールとは逆に、応えるタギイの声はわずかに興奮していた。

しかし、トールの足がタギイの頭よりも上の位置まで浮き上がりてしまつと、さすがに不安を覚えて、

「お、おいトール！」

「タギイ、タギイどうしよう… ぼく降りれない」

泣きそうな声が降つてきて、タギイは慌てて上へと手を伸ばす。「くそつ届かねえ！」

さらに大きな岩によじのぼり、力いっぱいジャンプする。目一杯伸ばされたタギイの右手が、しつかりとトールの足首を掴んだ。

そのままタギイが重りとなつて、トールを地上へと引き戻す。やわらかい地面に落下したタギイは、慌ててトールの体を地面に押さえつけるよつにして覆い被さつた。

「ごめん！ ごめんなトールつ……俺が、俺が外したから……」

体を離してしまつと、また、トールは空に飛んで行つてしまいそうだつたから、小さな両肩を押さえつけたまま、タギイは何度も何

度も謝った。情けない顔を見られたくなくて、その肩口に顔を埋めると、土と草の混じり合つ大地の匂いがした。

激しい揺れに襲われて、タギイは目を覚ました。

懐かしくも甘い夢の匂いは潮の香りにかき消されてしまつ。

ベッドから飛び起き甲板にあがると、船員たちはござつて舳先に集まつている。

体の大きな船乗りの間をぬつて、タギイも身を乗り出し見慣れた水平線へと目を向けた。

海の濃い青は、先ほど夢で見たトールの目の色を再び思い出させた。

タギイが1-2で町を出てから、もう1年以上会つていらない幼馴染の顔。

しかし感傷に浸つてている暇はなかつた。再び大きな揺れがきて、タギイは手すりに強かに腹をぶつける。

「おい、潮の流れが変だぞ！」

誰かが叫び、タギイはもう一度水面に目を向けた。波は決して穏やかではない。

海流は水平線へ向かつているはずなのに、一方で水平線から押し戻されている波がある。二つがぶつかる場所で大きなうねりが起こり、タギイたちの船はまさにそのうねりの最中にあつた。

「越えるぞ！」

船長の下した判断は、うねりを越えて水平線を目指すこと。引き返しはしない。彼らの目的は、地平線の向こう側。まだ見ぬ地をその目で確認することなのだから。

幸いにも風は水平線へ向かつて吹いている。複雑な潮の流れをぬうようにして船は進んだ。

タギイも屈強な男たちに混じつて、力いっぱい帆を張るロープを

引っ張った。

いくつ大きな波を越えたのだろう。

気が付くと揺れは収まっていた。

「タギイ、生きてるか？」

あごひげを蓄えた大柄の男が、力つきで甲板に転がっていた少年の頭を乱暴にはたく。

「痛ッ、死なねーよ！」

「そうだよなあ。新大陸を見つけて帰つて、愛しのルーシャちゃんにプロポーズするまでは」

飛び起きた少年の後ろからべつの男が茶々を入れた。口元はニヤニヤと笑みを浮かべている。

「う……！」

タギイが反論しようとしたときだ。

再び、船が大きく揺れた。

しかし今度は波ではない。

「滝だ！ 落ちるぞーーー！」

「は？」

船の前方が大きく傾く。

「海に飛び込め！」

言われるままにタギイは手すりを飛び越える。

船はもう半分以上、水平線の向こうに落ちかけていた。

水平線ではなかつたのか。

海の果ては滝だったのか。

新大陸などなかつたのか。

渦巻く水流のなか、タギイはその答えを見た。

沈んだ水の中で目を開くと、海の向こう側へ落ちていく船がはっきりと見えた。

そして、落ちていった船を、救い上げる大きな掌。

やせしく、ゆっくりと。

その救いの手をタギイは知っている。

思い出した。

ヘツリだ。

3年ほど前、故郷の町でヘツリに落ちたとき、タギイはあの手に救い上げられ、気が付けば元の場所に立っていた。

ここはヘツリだ。

あの場所と同じ。海の終わりであり、始まりでもある場所。

水面に顔を出したタギイの目の前には、先ほど掌によつて救いあげられた船が何事もなかつたかのように波間に揺れていた。

けれどもアレは一体どういうことだろつ。

タギイは、海の中、船を救うヘツリの掌を見た。

もう一つ、掌の向こう側に見えたアレ。

タギイのほかには誰も見ていないと言つ。人の掌はもちろん、アレも。

一体どういうことなのか。

確かめる術もないまま、タギイの船は港に戻ることになった。

海に出る「」とを告げると、誰もが皆、口をそろえて言つたものだ。「親不孝者」と。たつた一人、トールだけを除いては。そのころのトールは体調を崩しがちで、一日のうちのほとんどの時間を家のベッドの上で過ごしていた。

「新大陸を見つけたら、僕にも知らせてくれる?」

「当たり前だろ! あ、でも、ほら、あれだ。ルーシャに、変な虫がつかないようにならんとお前が見張つてろよ。俺の代わりに」

「タギイつてば」

「笑うな。約束だぞ」

「うん、約束するよ」

歩いて辿る帰り道。故郷に近づくにつれて、思い出されるのは子供のころの記憶ばかり。体の弱いトールとその優しい姉と過ごした草原の記憶。

森を抜けた先に存在する世界の終わりの場所、ヘツリ。

タギイはこれまでヘツリを三度見ている。トールを助けようとしてヘツリに落ち、戻ってきたときが一回目。二回目は、成人の儀のとき。三回目は海のヘツリだった。

タギイが海に出ると言つたとき、ルーシャはなんと言つたのだったか。止めてくれたのだったか。

不思議なことにタギイはよく覚えていなかつた。

いや、言われた言葉の意味をきちんと理解できていなかつたから、忘れてしまつたのだ。

「海にもヘツリがあるのよ。でもね、その向こうには別の世界があるんじゃないから。ヘツリが、世界を分断して、互いに世界を行き来できないようにしているのね。そう、言つていたの」

今のタギイには、ルーシャの言葉の意味が分かる気がした。

タギイが、海のへツリの向こう側に見たものは紛れもなくその別世界だったのだから。ほかの船員たちは誰も信じてくれなかつたけれど。

「ルーシャは、なんでそんなことを知つていたんだ」

海になど出たことのないはずの彼女。港町に出稼ぎに行つたときにも聞いたのか。

もう少しで家が見えてくる。ルーシャのことを思いながら顔を上げたタギイの視線の先に、見慣れた髪の色が見えた。一瞬、ルーシヤかと思って跳ね上がつた胸の高鳴りを抑え、タギイは目をこらす。トールだ。

背も髪も伸びていたから、ルーシャと見間違えたのだ。少年は背こそ伸びたものの、その肩は細く頼りないまま。足かせのせいだろうか。足取りはひどくゆっくりだ。ほとんど引きずるようにして歩いていく。彼の向かう方向には、森があり、その向こう側にはヘツリがある。

「トール！」

タギイの声は届かない。距離はあるが、二人の間には遮るものなどないはずなのに。

タギイの頭の中には、へツリへと引き寄せられるように歩いて行く子供のころのトールの姿がよみがえつた。

空の子供（2）

トールが足かせを付けている理由を知ったのは、10歳を迎える直前のころだ。

声の大きな親戚が噂話に興じているところに、運悪く遇合わせた。ただそれだけのこと。

「可哀想に」「足かせがないと、空に連れて行かれてしまう」「大地の子ではないのよ」「足かせなんかで縛りつけて」「でもそれしか方法が」「定着しなかつたてことは、生きるぞだめではなかつたんだろ?」

真実を聞いても、トールはそれほど驚かなかつたし、それほど悲しくはならなかつた。

両親も姉も、友達もみんな自分に優しくて、トールが生きることを許してくれていた。定着させてくれていた。だから、自分は大地の子として生きようと決めた。

けれど今は、一日中ベッドの上で、重たい布団の中で（そうしないと体が持ち上がりてしまうから）、目を閉じて考える時間が多すぎて、余計なことばかり浮かんでくる。

幼なじみは海に出てしまつた。姉は結婚して、もう少ししたら子供を産む。

「タギィとの約束、守れなかつたな」

港町で出会つたんだと幸せそうに結婚相手を紹介する姉に、反対する理由などなかつた。

姉の夫は学者の息子で、港町の学校で先生をしていた。トールがほとんど寝つきになつた後も、いろんな話を聞かせに来てくれたのだ。

彼の興味深い話のなかで、トールのお気に入りはヘツリにまつわる考察だ。ヘツリは彼自身の研究内容でもある。

「ヘツリから流れてくる川の話をしようか。ヘツリから、崖から水が流れ出でてくる場所があるんだよ。崖に向かって流れているわけじゃないんだ。変な話だろ？ しかも、その川はずつと流れ続けているわけではない。時には水が涸れることがあるし、氾濫することもある。見たこともない植物の葉が流れてくることだって……。僕はね、ヘツリの向こう側には世界が続いているんじゃないかなって、思うんだ」

トールは彼に、タギイが自分を助けようとしてヘツリに落ちたときの話をした。彼は深く頷いた後、こう言った。

「ヘツリは、僕らを向こう側の世界に行かせたくないのかも知れないね」

「でもぼくは、ヘツリに呼ばれた気がしたんだ」

トール自身、あのときのことはよく覚えていない。けれどこれだけははっきりと言える。ヘツリに呼ばれていたのだと。声を聞いたわけではないが、呼ばれていた。強引に手を引かれて連れて行かれたわけではないが、体が逆らえなかつた。

彼ならその答えを知っているのではないかと思つたが、義兄は困つたように笑つただけだった。

喉が渴いて、トールはベッドからゆつくりと身を起こす。筋力が衰えているせいと、上手く体を動かすことができなくなつていた。無理をして動かすと、脆くなつた骨が簡単に折れてしまう。壁づたいに廊下を歩む。姉の部屋の前を通り、母とルーシャの話し声が聞こえてきた。

「もうすぐね。おなかの子も順調ですって」

「そう……」

「どうしたの？ 何か気になることもあるの？」

優しい母の声。

ルーシャは、じばし逡巡してから重たい口を開く。

「……怖いのよ。もしも、もしも生まれてくる子が定着しなかつたら
どうしようつて」

不安でたまらないのだと、姉は涙混じりの声で訴える。一度、定着しない子を生んだことのある母へと。

「ルーシャ……」

親戚に何を言われても、トールは平氣だった。

両親や姉が、定着させてくれていたから。

「定着しない子は、生きられないんじゃないかつて……トールは、だつてあの子は、あんな状態で生きてるって言えるの？ 本当はあのとき空に帰してあげたほうがよかつたんじゃ」

空氣を裂くような音が、ルーシャの言葉を遮った。母が手を擧げたのだ。トールはそれを確認する前にそつと、扉の前から離れた。そのまま足は外へ向かう。

久しぶりに踏む大地は、きちんと自分の足を受け止めてくれた。視線を落とした足首には、しっかりと鉄の枷がはめられている。これがなければ、大地との結びつきは簡単に消えてなくなってしまうのだけれど。

トールの足は、意識しないままに森へと向かう。ヘツリのある場所へと。

自分は悲しいのか、傷ついているのか、トールには分からなかつた。

姉が、両親が、タギイが、トールがここで生きていくことを、定着することを望んだ。だからトールは生きてきた。走れなくても、オーラーをできなくとも、同年代の子供たちが海に出て、森で狩猟し、羊を追つて勤めを果たす中、自分だけは一日中ベッドで過ごすことになつても。

いつもならば枝葉が邪魔する獸道。しかしトールの進む方向だけは、木々が道を開けた。

あつさりと森を抜け、ヘツリが目前に広がる。

こんなところに来て、どうしようとこうのだねつ。

今回はヘツリに呼ばれたわけではない。トール自身が、無意識に足を向けたのだ。

ヘツリの向こう側に広がる霧の海。

そこに飛び込む勇気はなかつた。

トールは片足ずつ靴を脱ぐ。重たい足かせを、外す。途端に身が軽くなつた。

不自然につなぎとめられていた体が、大地から浮き上がる。

「トール！」

不意に飛び込んできた声。昔の記憶が混じり合つ。あの時も、止めてくれたのはタギイだつた。

変わらない、真っ黒に日焼けした懐かしい顔。だけど今度は、止めてくれなくていい。

「タギイ、ごめん。約束守れなかつた

「なに言つてんだバカ！」

旅の荷物を投げ捨て、タギイが走る。

もう、手を伸ばして届く距離ではないのに。高く高く舞い上がり、トールの体は空に帰つていいく。

「トール！」

眼下の幼なじみに、トールは笑いかけた。笑つたつもりだつた。小さな雫が地面に落ちていつて、自分が泣いているのだと気づく。涙は、大地に落ちるのか。

「どうしてぼくは定着しなかつたのかな。どうして、大地の子にはなれなかつたのかな……」

答えは誰にも分からないと知つていたけれど、ずっと聞いたかつた。

誰かを問い合わせたかつた。

「聞けよ！　問い合わせてやればいいだろつ　ヘツリの使者を…」

タギイの力強い声が、空気をふるわせる。

もう、手を伸ばしても届かない。

だから、タギイは投げた。

空に　トールの外した、足かせを。

それは放物線を描き、狙いすましたようにトール田がけて飛んでくる。結びつけられたロープの端は、大地にいるタギイが掴んでいた。

トールには、飛んできた足かせを掴まないこともできた。
けれども、選んだのはトール自身。

もう一度、大地に戻ることを。

空に、帰らないことを。

タギイはロープをゆっくりとたぐり寄せる。

あらためて地上で向かい合った幼なじみにどんな顔を向けたらいののか分からなかつたので、トールは笑つた。

「お前はいつも笑つてるんだよな。辛いとかしんどいとか、今みたいな弱音も一回も吐かずに」

タギイは半ばあきれたように、ぶつきらぼうな口調で言つ。

「だつて、ぼくが笑うと、みんなも笑つてくれるんだ」

だからずつと笑つていたかつた。笑つていなければいけないと思つていた。

涙を流したら、みんなが悲しむ。

「トール、俺は約束を守つたぜ。海のヘシリを見てきた」
タギイの言葉に、一瞬息を飲んだ。詳しい冒険話を聞きたかつた。しかし、その前に告げなければいけないことがある。

「……ルーシャ、結婚しちやつた」

「はー? うそ、だろ。信じらんねえ……!」

怒られるかと思ったが、ショックのほうが勝つたらしい。

「でも、すごく良い人なんだよ」

トールの言葉も頃垂れるタギイのフォローにはならない。

「それにね、もうすぐ……」

「トール! こんなところに居たのか」

もう一つ、大事なことを告げようとしたところで、第三者の声が

割つて入る。息を切らせて駆けてくる青年は、ほかの誰でもない、ルーシャの結婚相手だった。

タギイに紹介する間もなく、彼は続ける。

「大変だつルーシャが産気づいた。生まれそつなんだよ！」

ヘツリの使者

トールたちは森の中を急いだ。走れないトールを、タギイが背負つて。

タギイの首にしがみついたまま、トールは彼にだけ聞こえるように小さく呟く。

「ルーシャは、ぼくみたいな子が生まれたらどうしようって言つた」

彼女の不安が、お腹の中の子にも伝わったのだろうか。予定日よりもまだ、随分と早い。

「お前それであんなこと……」

「望まれて生まれてきたのなら、よかつたのに」

両親にではない。姉にでもない。

大地に。この場所に。

「んなもん、わかんねえだろ。お前のいる場所はここじゃないのか
もしけないだろ」

タギイの言葉は思わずものだった。

「俺は見たんだよ。海のヘツリの向こう側に、別の世界を。白い砂浜のある陸地をさ」

前を走る義兄の後ろ姿を見て、トールは考える。

「お前はここでは生きられないのかもしない。それが事実だとし
ても、お前の生きられる場所がここにもないなんて、どうして分か
るんだ」

タギイの言うことは暴論だ。彼が海に出ると決めた時に、新大陸なんであるもんかとバカにする周囲へ宣言した言葉と同じだった。
「誰も見たことがないからって、新大陸がないってどうして分かる
んだ」

暴論でも、トールは信じた。タギイの力強い言葉を。

今も、信じてみたくなっている。

「タギイ、新大陸つてどんなところだったの?」

「ちらりとしか見てないけど、すっげえきれいな砂浜があつたんだ。

それから、見たこともない植物も

話すタギイの表情はトールからは見えないけれど、その目はきつときらきらと輝いているのだろう。変わらないそんな様子が容易に想像できて、トールは笑つた。

日が沈み、夜が来て、月が空高く浮かぶころになつても、ルーシヤの子は生まれなかつた。苦しそうな姉の声を聞いていられなくて、トールは自分のベッドの中で布団をかぶつていた。ソファにはタギイが行儀悪く足を放り出し、毛布一枚で眠りについている。「ぼくね、出産がこんなに長いものだなんて思わなかつた」起きているのか確証はなかつたから、返事を期待していたわけではない。

「俺も……。すげえな、ルーシヤ」

暗闇のなかで、トールは頷いた。

母が自分を生んだときも、こうだつたのだろうか。こんなにも長い時間をかけて生んで、それでも、望まれて生まれなかつたのだと、本当に言えるのか。

やがて朝が来る。

家中に響く大きな泣き声で、トールは目を覚ました。

「生まれたんだ！」

「トール、立てるか？」

タギイの手を借りてベッドから出ると、廊下を歩いてルーシャの部屋に向かう。ルーシャがどんな顔で自分を見るのか、トールには怖かつた。

ヘツリの使者に会うことよりも、ずっと。

穏やかな朝日が、カーテンの隙間から部屋のなかに差す。わずかに開いた窓から、朝の空気が入ってきた。部屋のベッドの上で、少しだけ疲れた顔をしたルーシャが、生まれたばかりの子をしつかりと腕に抱きしめていた。

扉口に立つトールとタギイの姿に気がつくと、彼女は笑つた。トルと同じ笑い方で。

「入つておいで」

氣後れしながら、中へと足を踏み入れる。赤子はこれでもかというほど大きな声で泣いていて、トールは胸が苦しくなつた。

この場所に生きているんだと、強く主張するようだ。

「顔を見て。ほら、トールが生まれてきたときとそつくり」

トールがくしゃくしゃの顔をのぞき込むと、赤子はさらに激しく泣いた。びっくりして身を引いたトールを見て、ルーシャは快活に笑う。

しかしその笑みは、ふつと消える。

「……ヘツリの使者」

部屋の隅を見据えて、ルーシャが呟いた。赤子をしつかりと抱き直して。

トールも振り返り、ヘツリの使者を見た。黒衣に身を包んだ、背の高い男を。ヘツリの使者はトールを一瞥し、少しだけ驚いたようなそぶりを見せた。

「同じ人なのね。あなたの顔、覚えてるわ」

ルーシャはまるで仇敵に会つたかのように、男をにらみ付けている。トールもそういう気分になつてもよかつたのだろうが、彼に会つたのは生まれたばかりの頃のことで記憶がないせいか、ヘツリの使者を見てもいまいちピンとこなかつた。

男は何も言わなかつた。無言でルーシャに手を差し伸ばし、赤子を渡すようにと促す。

ルーシャは男をにらみ付けたまま生んだばかりの子を使へと託した。不本意でも、そうするしかないのだ。

「ヘツリの数だけ、ヘツリの代わりに、わたしが祝そう。1の種、2の芽、3の枝、4の葉、5の花弁、6の果実、7の種、8の芽、9の枝、10の葉、11の花弁、12の果実、一度重ねればもう十分。6つの大地に根を張るだろつ。大地の子よ、君を迎える準備は整つた……」

定着の儀はあつさりと終わつた。ルーシャの手元に返された赤子は、すっかり安心したように眠りに入つてゐる。

「重い。定着、したの？」

ヘツリの使者は頷いた、よう見えた。これで自分の役割は終わつた。そう言つように、踵を返そうとして、

「待て！「待ちなさい！」

タギイの手がヘツリの使者を止めたのと、ルーシャが叫んだのはほぼ同時。

一人は一瞬、どちらが喋るのか迷うように視線を交わした。しかし、二人は最終的にはトールを見た。視線を受けたトールは、顔を上げてヘツリの使者を見据える。驚いたことに、ヘツリの使者もトールを見ていた。どこか悲しげな色を、その目に浮かべて。

「ヘツリの使者、あなたに聞きたいことがあるんだ」

「聞こう。君にはその権利がある、空の子供よ」

ヘツリの使者の声は、直接頭のなかに響いてきた。トール以外のみなにも聞こえていいよう、隣のタギイが怪訝な表情を見せる。「ぼくは、どうして定着しなかったの」

ヘツリの使者は迷つていいようだつた。長い沈黙があつた。

「……長い話だ」

話すことを躊躇円つてゐるといつよりは、何から話そつか順序を確かめているよう。酷く人間らしいその様子に、こちらが戸惑つてしまつ。ヘツリの使者とはこんなにも、人に近い存在だつたのか。

「それじゃあお座りなさいな。立ち話では疲れてしまつわ。ほら、タギイとトールも」

母親がいつも調子でそんなことを言つものだから、ますますへ

ツリの使者が人間じみてくる。用意された丸椅子に大人しく座った
ヘツリの使者に、そんなものなのかと拍子抜けした。

そうして彼は話し始める。

トルたちが暮らす、世界の話を。

世界の理

「この世界には12人のヘシリが居ます。そして、世界は6つに分かれている。四角い世界のそれぞれの端っこを、ヘシリが守っています。この世界は6つの世界のうちの一つに過ぎません。そして、この村に隣接するヘシリはこの世界を囲む4つのヘシリのうちの一つ。わたしはそのヘシリの使者です」

突然の説明に、頭が追いついていけなかつたのはトールだけではなかつたらしい。

隣で頭を抱えるタギイに、ベッドの上で首を傾げるルーシャ。ベッドの脇で黙つて聞いていた義兄が、近くの引き出しからおもむろに羊皮紙とペンを取り出した。

「つまり、こいつのこと？」

義兄は紙に立方体を描いた。立方体の6つの面が世界で、それぞれの辺に「ヘシリ」と書き足す。

「そうです。実際の世界はもっといびつですが、だいたい合つています」

なんとなく分かつた。しかしそれでもなお、トールの定着できな理由を説明するのに、世界の仕組みから話さなければならぬのか、まだ分からぬ。

不可解だと顔に書いてあつたのだろう。ヘシリの使者は続けた。
「定着がどういうものなのかを分かつてもらうには、なぜ世界がこうなつているのかを理解してもらわなければいけません」

強い口調ではなかつたが、有無を言わさぬ迫力があつた。

「世界が丸かつたという昔の記録は残つてゐるが……まさか、四角いとは……」

学者の父を持つ義兄は、困惑を隠せぬ口にする。

「それも間違いではありません。はるか昔は丸かつた。ヘシリもなく、世界は一つでした。しかし、大きすぎる世界では、あまりにも

争いが多かつた。ですからヘツリは世界を分断したのです

ヘツリの使者の口調は乾いたものだった。彼の言つ昔がどれほど昔のことなのか、誰にも想像がつかない。だから、黙つて聞いていりしかなかつた。

「12人のヘツリが自ら世界を分かつ崖となりました。しかし世界を分断した影響で、人は大地との結びつきが弱くなつてしまつた。そこでヘツリは定着という方法を編み出しました。動くことのできないヘツリに代わつて私たち使者を作り、生まれたばかりの子のもとへと送り出すことにしたのです」

それが今の定着の儀なのだと、使者は説明を付け加える。

「先に申し上げておかなければいけないのは、ここから先お話することは事実ではなく、私の推測だということです」

明朗な使者の声が、初めて淀んだ。

「それはつまり、トールが定着できなかつた理由は、君にも確かにことが分からないつてことなのか？」

義兄が確かめるように問う。

トールにとつては、答えを聞きたくない質問だ。

もしも、ヘツリの使者がイエスと答えたたら、疑問をぶつける相手がいなくなつてしまつ。

結果的に、ヘツリの使者はイエスともノーとも言わなかつた。

「恐らく、ヘツリの力が弱まつてゐるのではないかと思うのです。あまりにも長い間、彼らは世界を分断し続けた。それは本来、自然な形ではないのです。大地の力をねじ曲げ、押し込めなければいけなかつた。世界は、元の姿を取り戻そうとしています。ヘツリはもう、それを押さえ込むだけの力がない」

「世界はまた、一つになると？」

「恐らく。定着できない子が生まれ始めたのも、その影響でしう。本来、生まれるべきではない世界に、生まれてきてしまつた。ヘツリを飛び越えて。ヘツリが力を持っていたころには、こんなことは有り得ませんでした」

「ぼくのほかにも定着できなかつた子がいるの？」

「トールは別の世界でなら、定着できるってことか？」

タギイとトールの声はぼぼ重なり合つていたが、ヘツリの使者はどうちらの問い合わせんと拾つて、答えを返す。

「定着できなかつた子は、いました。別世界での定着は、恐らく、としか答えられませんが、生まれてくる場所を間違えなければ定着できたでしよう。大地の子ですから」

彼の告げた答えは、トールの中に、絶望と希望を同時に生んだ。自分のほかにも定着しなかつた子供がいたこと。過去形である意味は、聞かなくとも分かる。

すでに、空に還つているからだね。

しかしヘツリの使者は、トールを“大地の子”と呼んだ。

だとしたら、

「ヘツリの使者、さん。ぼくを、別の世界に連れて行つてくれませんか？」

思いのほかかすれた声は、けれどもまつひとつ、皆の耳に届いて。

「トール……」

名前を呼んだのは母。

うなだれ、視線を逸らしたのは父。

「どうして……？ タギイ、トールを止めて…」

止めようと、手を伸ばしかけたのは姉。けれどもその腕にはもう、新しい命が抱かれていたから、代わりに彼女は懇願した。

「ごめん、ルーシャ。俺には止めらんねえ」

タギイは知つていて。トールが一度、空に逝くこととしたことを。ここに居ても生きられない、知つてしまつたことを。

「前例のないことです。けれども、君が定着できなかつた原因の一端は、私にもあります。あの時すぐに空に帰してやれなかつた責任も。君が望むのならばやつてみましょう」

ヘツリの使者の声は、今ではもう心地よくトールの心に響いた。

「足かせを外して」

誘われるまま、トールは父の作つた足かせを取り払う。ふわりと浮いた体は、ヘツリの使者によつて抱き止められた。彼もまた、わずかに宙に浮いている。

「ごめんなさい。お父さん、お母さん……ルーシャ」
トールは笑顔を見せた。どんな顔をしても、みんなが悲しむことは分かつていたけれど。

「ごめんな、トール。辛かつたな。足かせなんかはめて、ごめんな。本当は、ずっとこれが正しいことなのか、分からなかつたんだ。それでも……」

顔を上げた父は、トールをまっすぐに見てくれた。迷いながらも。母は泣かなかつた。別れが近いことを、覚悟していたのかもしない。

「トール、あなたがどう思おうとも、私は、生んでよかつたと思つてるわ。あなたが生まれてきてくれたことが嬉しかつたのよ。それだけは、」

何が正しかつたのか。何が間違つていたのか。どうすれば良かつたのか。

きつと、どうしようもなかつたのだ。

それでも、みんなが最前の方を考へた。トールが生きられるようだ。

「生まれてくる場所を間違えたなんて、勝手なこと言わないでよ……それでも、私たちは家族で、トールは私の弟よ！」

あの日、ルーシャは抱あえた。空に連れて行かれるようになる弟の体を。

あの瞬間から、トールはマーロウ家の長男に、ルーシャの弟になつたのだ。

「……ありがとう。ぼくは、幸せでした」

言葉に嘘はない。しかし、ルーシャの叫びを聞いても、トールの心は変わらなかつた。

「お前が決めたことだから俺は止めねえよ。けど、新しい世界がど

んなところかちゃんと俺に教えるよ 約束だ」

タギイの強い目が、静かにトールを射抜く。守れるはずのない約束。

それでも、トールは頷いた。

「別れは済みましたね。行きましょうか」

「はい」

わずかに開いていた窓から、不意に強い風が吹き込んだ。大きな音を立てて、窓が全開になる。風が、向かう道筋を教えてくれる。最後に一つだけ。

ヘツリの使者がトールの心に話しかける。

「君が別の世界で定着できたとしても、ここにいるよりも幸せになれるとは限りませんよ」

定着できなかつた大地の子は、答えを選ぶ。

「それでもぼくは、みんなみたいに走つたり、仕事をしたり、普通に生きたい。ただ、それだけなんだ」

定着できなかつた大地の子は、自らの定着できる大地を求めて、本当の居場所を求めて、一度、空に還る。

そして再び彼が生まれる時、その世界は本当の居場所なのだろうか。

「恐らぐ」

答えは、ヘツリの使者にも、分からぬ。

『ヘツリの消失』

『ヘツリの消失』 シュノ・トール・カーライル著

はじめに 空の子供たちに捧ぐ

地暦以前、世界が球形だったことは、これまでの研究で立証されたと断言しても良いものと思われる。しかし大地の隆起によつて世界は変わつた。世界は大きな立方体となり、ヘツリによつて分離された。私達は立方体の六つの面のうち、たつた一つの面で暮らしているに過ぎない。

(中略)

一人の少年が居た。彼が生まれたときにやつて來たヘツリの使者は、少年を「大地の子」にすることができなかつた。「定着」できなかつたのである。しかし、少年は12歳になる直前まで、ヘツリの側にある小さな村に暮らしていた。この少年の存在なくして、私の研究は成りえない。

(中略)

今、世界は再び変化の時を迎えるとしている。ヘツリによつて立方体となつた世界は、元の球形へと戻ろうとしているのだ。私がこの結論に至つた経緯は本論のなかで考察していくが、大きな理由は、「空の子」の存在と「真・大地の子」の存在にある。どちらも「ヘツリの使者」の本来の役割を必要としないという意味では、私は彼らを同じ存在と捉えている。

ヘツリの消失によつて、世界は新たな時代に突入するだろう。いつそれが起こるのかは分からぬ。百年後かもしれないし、明日かもしれない。しかし確實に訪れる。私はできればそれをこの目で見届けたい。祖父と父から受け継いだこの研究結果が、正しいことを

証明するためにも。

第一章 ヘツリの定義

- 1・1 十一のヘツリ
- 1・2 場所としてのヘツリ
- 1・3 信仰としてのヘツリ
- 1・4 定着とヘツリ

第二章 空の子の誕生

- 2・1 空の子・少年Aの記録1
- 2・2 北のヘツリに落ちた少年の証言
- 2・3 南のヘツリに落ちた船乗りの証言
- 2・4 空の子・少年Aの記録2

第三章 ヘツリの使者の役割

- 3・1 ヘツリの使者と母親
- 3・2 真・大地の子の誕生
- 3・3 ヘツリの使者の役割の変化

第四章 ヘツリの消失

- 4・1 白い花「トゥールウ」の発見
- 4・2 ヘツリの霧の濃度分析
- 4・3 百年間で見る海風の変化
- 4・4 ヘツリの使者の証言

おわりに 大地の子供たちに告ぐ

はじめに述べた言葉の前半部分は、私の祖父タギイ・カーライルが生前に書き遺したものから引用した。船乗りだった祖父は晩年、陸に上がりからはヘツリの研究に没頭していた。いや、船乗りであつた頃も、祖父は南の海のヘツリまで航海し、ヘツリを見ていたと聞く。彼をそこまで駆り立てたものは何だったのか 冒頭部分 でも、本論のなかでも述べたが、空の子であつた少年Aの存在に他

ならない。

祖父は、すべての空の子に向けて書いていた（道半ばにして途絶えたが）。すべての空の子が、ヘツリの向こう側の世界で今も楽しく過ごしていると信じて。

しかし私はあえて、自らを含む、今は大人になつたすべての大地の子に向けて告げたい。私と、祖父と父が長年調べ続けてきたこの研究結果が正しいのならば、空の子を産み、我が子を手放さなければならなかつた母親たちの救いになるだろうと信じて。

空の子が、ヘツリの向こう側の世界で定着し、元気に生きていることを願い、ヘツリの消失によつて再び一つになつた世界で母と余ることをただ願つている。

私自身、かつて空の子を産んだ、一人の女として。

『ヘツリの消失』（後書き）

文字書き内輪サークル「タノレトリックス」の課題で書きました。
「立方体」「高鬼」「無重力」で世界観をつくるという課題。
高鬼が見事に世界観関係ないといつ。話の中では結構重要な要素なんですが。

トールが幸せになれたかどうかは分かりませんが、この話をハッピーエンドにするなら、ヘツリが消失して世界が一つになつた後、トールの生まれ変わりとタギィの子孫が出逢つて、お互いの世界の話ををして、トールが約束を果たして終わりかな、と。

この話はトールの話ではなくヘツリと定着という機能を持つ世界の話なのでその辺は書かないけど。

読んでもやつとせてしまつたら申し訳ないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7151s/>

世界のヘツリ

2011年6月7日23時55分発行